

高次脳機能障害を有する就労移行支援事業所通所者に対する 刺激等価性理論に基づいた訓練の実施とその効果

○岩村 賢（株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所 研究員）
齋藤 祥子（株式会社スタートライン FITIME渋谷）
刎田 文記（株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所）

1 背景と目的

刺激等価性理論に基づく訓練は、障害児・者が言語・認知機能を獲得・形成する際に、有効な手段として利用されは始めている。また、刺激等価性スキルは、業務上のコミュニケーションや作業等、様々な職業場面での活用が必須であるスキルであると考えられる。

障害者リハビリテーション分野においては、刺激等価性スキルの獲得が不十分である、またはそれが後天的に失われてしまうことで、業務上の課題が生じてしまう場合も多くあると考えられる。私たちは、後天的に失われたと考えられる刺激等価性スキルでも、刺激等価性訓練を実施することで訓練できるのではないかと考えた。そこで、本研究では高次脳機能障害を有する成人を対象に、PC上で実施できる刺激等価性訓練の効果について検討することを目的とした。

2 方法

(1) 参加者

就労移行支援事業所に通所している、高次脳機能障害を有する50代の男性、Aさん。

(2) 訓練実施前における就労移行支援事業所での課題

対象者が通所する就労移行支援事業所の支援員から、就労に向けた課題点がいくつか挙げられた。

ア 口頭による指示理解の難しさ

口頭での指示の場合、指示全体の内容の理解が難しかった。口頭による指示では、最初か最後の一言のみで判断し、作業を進めてしまうケースが見られた。また、支援員が複数の用語を用いて口頭による指示を行うと、本人は「わかりません」と回答した。加えて、指示の理解があいまいであった場合には、次にとるべき行動がわからず、スマホを触るなどの不適切と判断されがちな行動が見られた。

イ 自身の状態や感情の表出の難しさ

自身の現在の体調や訓練の感想などを他者へ適切に表出することが難しく、支援員から具体的な質問を行っても「わかりません」と回答していた。

ウ メモ活用の難しさ

支援員からメモの活用を促された際にメモを取ることはできるが、その後に、メモした内容から必要な情報を検索・取得することはできなかった。

(3) 評価

訓練実施前後に対面で以下の評価を行った。

ア PCA

PCAは言語・認知能力を評価するツール¹⁾であり、刺激等価性/関係フレームスキルの訓練パッケージであるPEAK²⁾を基に開発されたアセスメントツールである。PCAは、D（直接体験学習）、G（般化）、E（刺激等価性）、T（関係フレーム）の4つのモジュールに分類されている。さらに、Tには、図版を見て正解を選択する形式の「理解」、音声の読み上げに対して音声表出で回答する「表出」の二つの評価モジュールが用意されている。本研究では、E、T理解とT表出の3つを用いて評価を行った。

(4) 訓練

ア 訓練実施期間

X年9月～X+1年11月までの15ヶ月間訓練を行った。

イ 訓練課題

PC上で実施できる刺激等価性理論に基づいた、見本合わせ訓練を実施した。課題は、PEAKの訓練パッケージを参考に作成した刺激等価性課題を用いた（図1）。

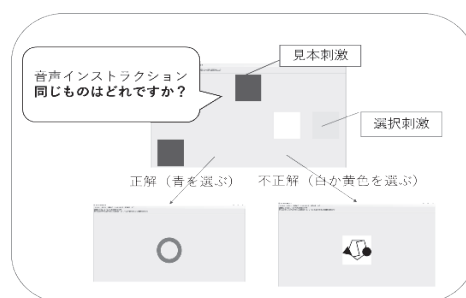


図1 PC上の訓練イメージ

ウ 実施方法

Aさんは、平均して週に1回、1回30分から60分程度、PCを用いて訓練を実施した。基本的には参加者は単独で訓練を実施したが、正答が難しい課題については支援者が補完手段やプロンプトを呈示しながら訓練を実施した。

3 結果

(1) 訓練の詳細

Aさんは、累計で82課題に取り組み、平均正答率は89.3%であった。正答率が100%にならなかった課題については、支援者の解説や補完手段を用いて、テストで100%になるまで訓練を続けた。

表 1 実施課題の詳細

訓練内容	実施訓練種類数	テスト時平均正答率
対称律	15	86.5%
推移律	8	88.1%
等価律	59	90.2%

(2) PCA結果

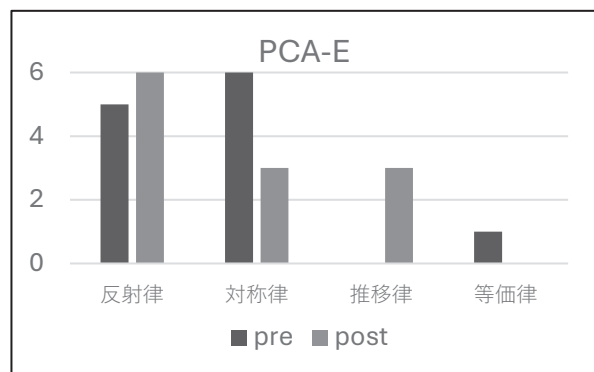


図2 刺激等価性スキルの変化

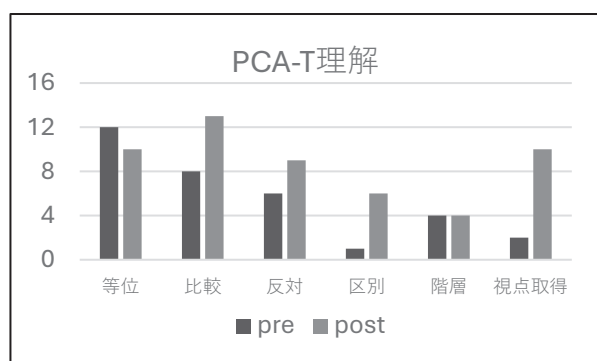


図3 関係フレームスキル（理解）の変化

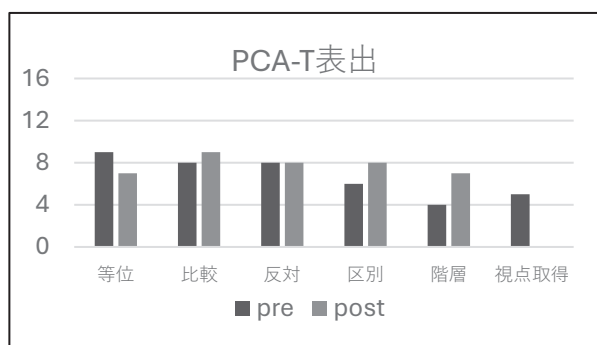


図4 関係フレームスキル（表出）の変化

PCAの結果を図2～4に示した。モジュールEでは、推移律の得点が向上した。Tの理解は等位、階層を除き向上した。Tの表出は視点取得の得点は低下したものの、比較、区別、階層の得点は向上した。

(3) 訓練後の行動変化

課題点に関して支援員から以下の報告があった。

ア 口頭指示理解の難しさ

「わかりません」と以前回答していた内容に関しても、「どうやるんですか」と質問することができるようになった。また、指示の流れが理解でき、スマホを触るなどの行動はなくなった。

イ 自身の状態や感情の表出の難しさ

訓練中のグループワークでの感想を支援員に伝えるようになった他、使用する語彙が通所初期と比較して増加した。

ウ メモ活用の難しさ

メモを利用することで刺激同士のつながりを理解し、必要な情報を検索できるようになり、それを他の課題でも活かすことができるようになった。

4 考察

(1) PCA-Eモジュールでの推移律の得点の向上

メモ等を活用する中で、複数の指示のつながりを理解し、衝動的に「わかりません」と回答するのではなく、考えたうえで回答できるようになった可能性が示された。結果として、自発的な質問ができるようになったと示唆される。

(2) 未訓練のTモジュールの向上

本研究では、刺激等価性訓練のみを実施したが、フレームごとの変化に差異が見られたものの、未訓練の関係フレームスキルにも向上が認められた。刺激等価性スキルの訓練により、障害受傷以前に獲得していた関係フレームスキルが、様々な派生的関係反応として引き出された可能性が考えられる。つまり、刺激等価性スキル訓練が関係フレームスキルの再獲得を促したことが示唆される。

5 本研究の課題点

就労に向けた面接において、準備をしていない質問について、うまく回答することができない、という課題が見られた。これは、相手がどのような意図で質問をしているのか、という視点取得の関係フレームの弱さに起因しているものと考えられる。刺激等価性の訓練を、より精緻に積み上げ、関係フレームに関する訓練の導入が必要であろう。

また、本研究では刺激等価性スキル訓練が関係フレームスキルの再獲得を促したと考察したが、再獲得のメカニズムの評価手法について検討を行っていきたい。

【参考文献】

- 1) Dixon, M. R. PEAK comprehensive assessment. Shawnee Scientific Press. 2019
- 2) Dixon, M. R. The PEAK relational training system. Carbondale: Shawnee 2014-2016